



非業の死の記憶——追悼儀礼のポリティクス P4

■ 巻頭エッセイ

榊原 哲也 赤川 学

■ イベント報告

公開シンポジウム

「非業の死の記憶——追悼儀礼のポリティクス」

ワークショップ「死者の記憶と表象のポリティクス」

生と死をめぐる映画上映会II「チーズとうじ虫」上映会・監督講演会

＜ホームビデオがドキュメンタリー作品になるとき＞

国際・公開シンポジウム『礼拝像と奇跡 東西比較の試み』を終えて

第3回応用倫理・哲学研究会

ロバート・ニーマイヤー教授講演会

「喪失の体験と意味の再構成——レジリエンス[復元力]に関する最新動向」

他



ロバート・ニーマイヤー教授講演会 P10

■ 企画案内

グローバルCOE冬季セミナー <医療・介護従事者のための死生学>



「滅びの美学」の構築に向けて 死生学と社会学

赤川 学 (人文社会系研究科准教授 社会学)

死生学という魅力的な学問を、私なりに理解するならば、生まれること、生きること、老いること、死ぬこと、つまり生物や人間の活動すべてを射程に収める壮大な学問体系ということになるであろうか。私自身は、社会学の世界に身を沈めて約20年にしかならない若輩者だが、率直に言えば、死生学という学問の枠組みはいささか縁遠いものだった。自らの不勉強といってしまうまでも、それでも理由を探してみると、社会学はこれまで、死生のうちでも、とりわけ「死」を扱うことが不得手であったところに遠因があるように思われる。

というのも社会学は、生きている人間が織りなす相互行為や制度やシステムの全体、すなわち「生」に関心を払ってきたからである。格差、不平等、権力、近代化、グローバリゼーションといった社会学お得意のテーマは、ほとんど人間の「生」の側面にしか関心がなく、そのような枠組みのもとでは、「死」は、行為の連鎖やシステムの意味を究極的に無化する盲点のようなものだった。社会学のなかでも「死」を扱ってきた数少ない例外 宗教社会学や医療/臨床社会学 でさえも、通常は、「死」という究極的な無意味を、「生」の側にある人間や社会がいかに意味づけ、扱ってきたかを中心的に問うてきたように思われる。率直に言って「死」は社会学にとって「取扱い注意」のテーマであり、一種のタブーと化しているといっても過言ではない。かつてゴーラーが指摘したような「死のポルノグラフィ化」(隠蔽されるべき存在としての死)という現象は、一般社会だけでなく、社会学の世界でもあてはまるのではないか。

だから社会学者が「死」について語ることは難しい。私自身にも、何の用意もない。正直に言えば、死のことを考えるには、社会学の本など読むより、田沼靖一『死の起源 遺伝子からの問いかけ』(朝日選書、2001)や福岡伸一『生物と無生物のあいだ』(講談社現代親書、2007)を読んだほうが、よほど啓発される。

しかしこのところ、これまた漠然とではあるのだが、生物や人間に「生」と「死」があるように、社会にも「生」と「死」があるといえるだろうか、と考えるようになってきた。それは、少子化問題を検討していく中で、21世紀以降の

日本社会にとって不可避の事態としての人口減少という問題に逢着したからである(他の先進国でもいずれは問題になる)。といっても私の場合、少子化や人口減少に歯止めをかけなければ、と政策指向で考える(煽る)のではなく、その逆に、人口増加や経済成長をあてにせず、美しく滅びていこうと提案したいわけである。その試みは、究極的には社会(今の場合は、日本国民)が全体として老いていくこと、さらには縮小しながら滅びていくことをどう見届けていくか、という問題に突き当たらざるをえない。

もちろん、人口減少という問題を必要以上に畏れることはない。「国破れて山河あり」というが、日本の人口が減少し、万一消失したとしても、人間や自然や地球がなくなるわけではない(そもそもグローバルには、21世紀中は人口爆発のほうがはるかに問題だ)。人々の営みという意味での「社会」も、存続し続けるだろう。そうってしまうと身も蓋もないが。

しかし他方、人口減少という「問題」を先進国の中でも最も早く引き受けることになる私たちは、その老い方、衰え方、滅び方の範を世界に示すという気概をもってよいのではないかと、とも思う。生物や人間という「個体」の死を超えて種が存続していくように、美しい消滅のあり方を後世に残すことなら、私たちにもできるのではないかと。それは個人的な倫理の問題というよりむしろ、公共的な理念に基づく社会構想、社会づくりの問題であるように思われる。私はさしあたり、そのような社会づくりの根本的理念として選択の自由と負担の公平という原則を考えたいと思っている。人口減少社会を生きる仕組みについて考えること、どうやらそれが、私にとっての死生学ということになりそうだ。

公開シンポジウム「非業の死の記憶 追悼儀礼のポリティックス」 ワークショップ「死者の記憶と表象のポリティックス」

池澤 優（人文社会系研究科准教授 宗教学宗教史学）

9月19日、20日の二日にわたって、フランス国立極東学院・トゥールーズ大学社会人類学研究所との共催により、標記の研究集会を開催した。この研究集会は2003年度「死者と生者の共同性」、2005年度「死とその向こう側」、2006年度「死とその向こう側」など、死者とは我々にとって何であるのかをテーマとした一連の会議の延長線上に企画されたもので、今回の主題は戦争や災害による不慮の死、一度に多くの人々が亡くなる状況での死において、死者の記憶がどのように構築され、伝承され、あるいは操作されているか、追悼・慰霊の儀礼を焦点として考えることである。2005、06年と同様、フランス国立極東学院の全面的な協力の下、フランスと日本から多様な分野の方々を招聘することができた。

19日（金）の公開シンポジウムは、法文二号館一番大教室において、午後1時から始まった。立花文学部長の開会挨拶、司会（池澤）による趣旨説明の後、第一部として明治大学の山岸智子教授による「カルバラの悲劇」の多義性、トゥールーズ大学のマヌレーヌ・アルベール＝ロルカ教授による「戦没者の谷」から共同墓地の掘り起こしへ：スペイン内戦（1936-1939年）の死者の記憶について、東京学芸大学の岩田重則教授の「地域社会のなかの「英霊」」の3つの発表をしていただき、フランス社会科学高等研究院のアルベール・ジャン＝ピエール教授にそれに対するコメントをお願いした。短い休憩の後、第2部として、フランス国立極東学院のイヴ・グディノ教授の「行き場のない魂と死体：ベトナム戦争死者における死者たちの象徴的再統合と身体の帰還をめぐる」、NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワークの黒田裕子理事長の「阪神・淡路大震災に見る公的システムの欠陥と自助システムの構築」、フランス国立極東学院のオリヴィエ・ド・ベルノン教授の「政治的声明から商業的猥褻へ：プノンペンとその周域におけるクメール・ルージュの犠牲者の追想の扱い」の3本の発表、そして深澤克己教授からコメントをいただいた。公開シンポジウムは同時通訳をつけたので、時間を効果的に使えたが、このような催し事の常として、最後は時間が足りなくなり、最後の総合討論に十分な時間が割けなかったのは残念であった。しかしながら、戦争や災害による非業の死者の記憶とい

う共通テーマの下で、実に多様な題材と視点が開示され、約百名の聴衆も十分に堪能していただけたことと思う。なお、シンポジウム終了後、医学部教育研究棟のカポ・ペリカーノにおいてレセプションを挙行了。遠方から参加して帰郷の時間が迫っている方を含め、全ての登壇者が参加していただくことができ、総合討論の時間のなさを補う機会となった。

20日（土）のワークショップは、台風が迫る中、どのくらいの来場があるか心配しながら午後1時から始まったが、結果的には心配することはなかった。このワークショップは、関係者一同が十分に意見交換するために、主に若手の研究者（COEの特任研究員を含む）に発表してもらい、それに関して質疑応答するという趣旨で企画されたものである。先ず基調発表を行い（法文二号館一番大教室）、次に二つの分科会に分かれ（法文1号館215・315教室）、最後に再び一堂に会して総括を行う（215教室）という構成であり、同時通訳はつけず、臨機応変に討議に通訳をつけた。冒頭でCOE代表の島園進教授から挨拶をいただき、基調発表はフランス国立科学研究センターのセバスティアン・タンク＝ストルベル教授の「在アルゼンチン・イスラエル共済組合に対するテロ記憶の政治への転換」と末木文美士教授の「日本における戦争の死者と宗教」。分科会は大稔哲也准教授の司会で、藤崎衛COE特任研究員「中世ユダヤ人迫害に関する死者の記憶構築 儀式殺人の非難と1096年の虐殺」、フランス開発研究所のグレゴワール・シュレンメル研究員「死者による政治 ヒマラヤの住民、クルン・ライ族における先祖、邪悪な死者、行動様式」、嶋内





博愛特任研究員「子どもの<死>はどう捉えられてきたか ドイツ民間伝承における怪火と水と死者の魂」、社会人類学センター博士候補生のアビガイル・ミラ・クリック氏「『砂漠の犠牲者』

国境での若干の死をめぐる道徳的・政治的考察』分科会は「極東学院のアンヌ・ブッシィ教授の司会で、富澤かな特任研究員「英領インドにおけるイギリス人の死の記憶 カルカッタを中心に」、ツールーズ大学ステファニ・ミュロ准教授「グアドループの文化政策における奴隷貿易と奴隷制の記憶と形象化」、鹿児島大学の西村明准教授「記憶のパフォーマティヴィティ 犠牲的死がひらく未来」、モンペリエ第二大学エリック・ヴィラゴルド准教授「2001年9月11日の表象とメモリアル」。総括では分科会でそれぞれ司会をつとめた大稔・ブッシィ両氏にそれぞれの分科会の要約とコメントをしてもらい、最後に総合司会をつとめられた佐藤健二教授に全体の概括をしていただいて、締めとなった。個々の発表の後に十分に質問の時間をとったが、しばしば討論は白熱したために、最終的に予定時間を大幅に超過し、終わったのは何と7時半であった。

公開された企画ではないが、21日（日）にはフランスからの来訪者を中心に都内の戦没者慰霊施設を見学した。訪問したのは靖国神社・遊就館、東京都慰霊堂・東京都復興記念館、護国寺（陸軍墓地跡地）である。朝9時半に出発し、途中から大雨の中、5時頃に東大正門に戻って、将来の再会を約して解散となった。

今回の研究集会では極めて多岐にわたる論題が登壇者から提示され、果たして全体の統一性が保てるか危惧されたが、会場において見事に話がか

み合っているという感想を聞いたし、司会自身もそう感じた。これは諸発表が扱った題材の文化や時代の差にもかかわらず、期せずして非業の死の記憶の共通構造を衝いていたからであろう。それは第一に死者の記憶が持つ力 未来に対する行動を喚起する力であり、第二に、それが故に死者の記憶は生者の有する現実の認識や未来の理想によって構築されるという点である。記憶を構築する以外に死者を存続させる方法はないが、自分が持つ死者の記憶を絶対的なものと思いこむと、単に生者の主張のために死者を利用することにしかない。今回の研究集会は真摯に使用者の声に耳を傾ける謙虚さが大事であることを示していたように思われる。

全体として集会は大成功であったが、課題も残った。一番大きいのは、どうしても最後の総合討論の時間がなくなるという問題である。今後は、あらかじめフルペーパーを参加者に配布して、討論のみを行うラウンドテーブルの如き形式を模索する必要もあろう。

最後であるが、今回もCOEの特別研究員を中心に多くの人々のご助力によって、無事、研究集会を終了させることができた。会議運営の中核となった活躍した藤崎衛さん、富澤かなさん、吉澤保さん、私の足りないところを常に補ってくださったAnne Bouchy、島園進、佐藤健二、大稔哲也の諸先生、当日通訳として大活躍いただいた神田浩一さん、下田隆之さん、坂野正則さん、伊達聖伸さん、そしてお忙しい中、快く登壇をお引き受けくださった皆さんに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



国際・公開シンポジウム

『礼拝像と奇跡 東西比較の試み』を終えて

秋山 聡（人文社会系研究科教授 美術史学）

去る5月31日（土）、本G-COE主催による国際・公開シンポジウム『礼拝像と奇跡 東西比較の試み』が行われた。昨年12月に開催されたシンポジウム『聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み』に次ぐ「死生と造形文化」シリーズの第二弾としての今回のシンポジウムは、美術史学会の後援を得て、美術史学会第61回全国大会会期中第二日目に同時開催行事として催行されたものである。会場には当初一番大教室のみが予定されていたが、参加される方々の人数が教室のキャパシティを上回る可能性が生じたため、視聴覚センターの小野さんをお願いして、念のため向かい側の二番大教室でも、映像によりシンポジウムが聴講できるように手配した。当日は、一時的にせよ、二番大教室までもが残席わずかという状況に至ったのは、企画・運営担当者には嬉しい（？）誤算であった。

さて、シンポジウムは本G-COEのサブリーダーを務める下田正弘教授によるご挨拶と私からの簡単な趣旨説明の後、招待発表者四氏が順次講演を行った。まず長岡龍作東北大学教授が、「仏教における「霊験」- 仏が感応する場と表象」と題して、仏教において奇跡が起きる要件として「場」、とりわけ景観としての山水が重要であることを、習合との関連において論じられた。次いでハーヴァート大学美術館のアイヴァン・ギャスケル教授による「複製技術時代以降のキリスト教の聖像を求めて」では、礼拝像の複製手段としての写真とインターネットの無効性/有効性が、具体的事例に即して議論された。さらに、加須屋誠奈良女子大教授は、「予告された「往生」の絵 - 清涼寺所蔵「迎接曼荼羅」をめぐって」と題し、往生という奇跡のイメージトレーニングのための造形イメージの機能について、政治・宗教的背景を含めて論じられた。最後に、世界中を飛び回っている在フィレンツェ、ドイツ美術史研究所長ゲアハルト・ヴォルフ教授は、当日成田空港に降り立たれたものの、どうにか遅滞なく会場に到着され、「中近世ヨーロッパにおける芸術と信仰のはざまの奇蹟像」と題し、ハンス・ベルティンクによる通説に対する反論として、中近世において「芸術」がむしろ奇蹟像の普及を促進させた側面があるという議論を展開された。

これら四つの講演の後、コメンテーターとして



秋山 聡

まず本G-COE事業担当推進者でもある大稔哲也准教授が、提示された諸事例と関連付けつつ、中近東文化における聖遺物信仰や聖画像・聖人像について紹介した。そして最後に、文化庁の奥健夫文化財調査官が具体的に各講演の内容にコメントを加え、さらに極めて興味深い関連諸事例を紹介した上で、聖像がその媒介性という点において、広い意味での「場」（あるいは「サイト」）でもあった可能性を指摘された。残念ながら、全体的に時間がずれこんでしまい、東西比較を検討すべきディスカッションの時間を設けることができなくなり、前日に開催された美術史学会のシンポジウム『世界美術史の可能性』にパネラーとして参加されたイースト・アングリア大学のジョン・オナイアンズ名誉教授やケース・ウェスタン・リザーヴ大学のデヴィッド・キャリアー教授等に簡単なコメントをいただくにとどまった。これは企画者の不手際以外の何物でもなく、誠に申し訳ないことと反省している。ただ、終了後口頭ないし書面でいただいた感想は、比較的好意的なものが多く、宗教美術間の相互の比較の有用性が多少とも再確認されたとすれば、このシンポジウムの開催にも幾ばくかの意義があったと言えるだろうか。なおこのシンポジウムについては、来年度、日本語版が『死生学研究』に掲載、英語版は別冊子として刊行される予定である。末筆ながら、5時間に及ぶ催しにご参加くださった方々、また運営に携わってくださった多くの方々に深く感謝いたします。

生と死をめぐる映画上映会 「チーズとうじ虫」上映会・監督講演会 ＜ホームビデオがドキュメンタリー作品になるとき＞

高橋 都（医学系研究科講師 公衆衛生学・内科学）

生と死をめぐる映画上映会第二弾として、長編ドキュメンタリー映画「チーズとうじ虫」上映会と加藤治代監督講演会が7月12日に医学部鉄門記念講堂で開催された。金曜夜にもかかわらず150名ほどの聴衆が集い、静かな感動につつまれた会となった。

本映画は、がんで余命1年と診断された最愛の母を看病するために故郷に帰った加藤監督が、母と高齢の祖母と自分自身の生活を家庭用のビデオカメラで撮りためたセルフドキュメンタリーである。映画は、治療を受けながらも淡々とユーモアを持って暮らす母を中心とした女三人の日々を記録した前半と、母の死後、遺された祖母と加藤さんが痛切な喪失感と向き合って同じ家で暮らし続ける様子を記録した後半からなる。予想された余命を超えて生きる母が治るかもしれないと考えた加藤さんが「母の奇跡」を記録するつもりで初めてビデオカメラを手にして撮った作品は、2005年の山形映画祭で小川伸介賞と国際批評家連盟賞、さらにフランス・ナント三大陸映画祭ドキュメンタリー部門グランプリを受賞し、各国の映画祭にも招待されて高く評価された。（映画に関する詳細は、「チーズとうじ虫」公式サイト <http://chee-uji.com/> を参照）

映画の前半はまさにホームビデオ的な場面が続くが、遺体となった母のアップから始まる後半になると、母の絶対的不在と寂寥感が画面全体から痛いほど伝わり、やがて一種の覚悟、あるいは決意のような何かがちのぼってくるように感じられた。そして、冗長とも思えた前半の映像のひとつひとつが、また違った意味をもって思い出されてきた。

母の病状が悪化して死に至るまで「（母の）背中をさする手はあっても、カメラを持つ手はなかった」ために撮影を中断していた監督は、火葬直前の母の遺体を前にして泣きながら再びカメラを持ち、映像を使って人に伝えたいことを自問自答しながら撮影を続けたという。“この出来事から何かを伝えねばならない”という覚悟は、“この現実と向き合ねばならない”という覚悟にも通じていたのかもしれない。対談ではまた、最愛の母の死という現実と対峙するにあたり、撮りためた映像を編集する作業が一種セラピー的な効用をもたらしたことも話題にあがった。映像を突き放

して客観的に観る編集作業が「それだけではどうしても考えたくなかった」母の死と自分の間に距離を獲得していく助けになったのだという。「自分の身に起こっていることを鏡のように“これはどういうことなんだ”と観るために、（編集は）とてもいい道具だった」と監督は語った。そして、「こんなに悲しいけれど、これはよくあることで、自分の母親が自分より先に行くのはごく自然のことだ」と徐々に気づいていけたのだという。

この映画を透徹した哀しみの映画とみるか、愛する者の喪失からの再生の映画ととるかは人によって異なるだろう。もし少しでも後者の要素を感じるとしたら、人間は愛する者を失ったあともずっと昔からこうして生きてきたし、生きていくものなのだ、という普遍的なメッセージが、この個人的記録の中から静かな励ましとなって観る者に伝わるからではないか。聴衆から“チーズとうじ虫”というタイトルの意味を質問された監督は「それだけは起きてほしくないと思っていたことを初めて経験して、悲しいながらちゃんと見た時に、次の糧になっていくような、そういう経験っていうのがきっとあるんだろうな、と。だから臭いものにフタをするのではなくて、臭いものも大事。そういう意図があります」と答えていた。海外の映画祭でこの映画を見た観客は、死生観や宗教のような抽象的な話ではなく、自分の家族の病気や死について監督に語ることも多いという。当日の参加者アンケートにも「他者の家族を見ることで、私個人の家族がずっと頭にある」というコメントがあった。監督が直視した母の死とその後の記録は、観る者ひとりひとりに確かに響き、その人と家族とを結びつけているように思える。



第3回応用倫理・哲学研究会

一ノ瀬 正樹（人文社会系研究科教授 哲学）

去る2008年7月19日、文学部哲学研究室にて、「第三回応用倫理・哲学研究会」を開催した。本研究会は、旧「応用倫理勉強会」を引き継ぎ、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の恒常的活動の一つとして改めて発足した会であり、主として若手研究者による応用倫理あるいは応用哲学に関する研究発表の場として機能している。今回の第三回も、哲学研究室、インド哲学研究室、社会学研究室から三人の発表者が集い、盛会であった。実は、当日は、諸般の事情で「死生学セミナー」と同時開催ということになってしまい、参加者の集まり具合が懸念されたのだが、予想以上に多くの方々が参集してくれた。応用倫理、応用哲学、死生学、といったフィールドが相当に定着してきた証しであるように思う。さらに加えて今回は、たまたま哲学研究室に外国人研究員として来日していた、中国・山西大学学長の郭貴春教授にも特別講演をしていただくことになった。思いがけず、まことに意義深い会となった。

研究会は、哲学研究室の相澤康隆氏の「死は当人にとって悪いものか - エピクロスの死生観に対する反論の試み - 」と題された発表から始まった。「エピクロスの死生観」とは、「死は何もかもなくなることなのだから、死んでしまったならば害悪を感じることもないし、それを感じる主体も存在しない、よって死は悪いことではない」という議論である。これに対し相澤氏は、トマス・ネーゲルの議論を引きながら、死そのものではなく死後にもたらされる悪、生きていたならどうだったかという可能性、などを考慮して、エピクロスの死生観を克服する道を示そうとした。大変に活発な質疑が起こり、研究会としての面目躍如であった。次に、インド哲学研究室の堀田和義氏が「ジャイナ教の倫理規定 - 在家信者の生活規則と死を迎える儀礼を中心に - 」と題して発表した。不殺生と苦行を基本とするジャイナ教の五つの戒めが、果たしてどのように在家信者の中で実践されているか、実践可能なのか。また、断食死を意味する「サッレーカー」が自殺とどのように区別されるのかなど、根本的な問題が論じられ、再び議論は大いに白熱した。そして三番目に、社会学研究室の土屋敦氏が「遺伝学的エンハンスメント論の歴史性と優生主義の現在性 - 「先端生命科学技術」に対する「文化的期待」の編年史 - 」と題して、



現在の応用倫理の中でも最も物議を醸している話題について刺激的な発表をした。土屋氏はこの問題の根底には、私たちの生きている時代的素地の中に芽生えて来つつある「生得領域 / 習得領域」という境界のゆらぎがあると喝破し、系譜学的な考察の可能性を示した。これもまた大いに議論を呼び起こし、次から次へと質問が提起され、問題への理解が深まっていった。

その後、先に触れた郭貴春教授による特別講演が、「The Present State and Developmental Tendency in the Contemporary Philosophy of Science」という表題のもとで行われた。郭教授は、現代の科学哲学が、歴史主義の時代が終結した後、混沌の状態にあるが、それでも科学的合理性の理念に繰り返し戻ること、今日の文脈に即した新しい道筋を描けるのではないかと、という提題をした。中国の研究者と英語で討論する貴重な機会ともなり、研究会は多いに盛り上がった。その後も懇親の場で議論は続き、死生学研究の着実な歩みを実感された一日であった。

ティーレ・ケルコピウス氏講演会

「エイズ患者さんと共に生きる」

山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講座特任講師 死生学・医療社会学）

2008年9月1日、法文1号館315教室にて、ドイツにあるエイズホスピスの施設長ティーレ・ケルコピウス氏を迎え、「エイズ患者さんと共に生きる」と題する講演をしていただいた。

ケルコピウス氏が施設長を勤めるハウス・マリア・フリーデンは、フランシスコ会女子修道会の手により1991年にドイツ南西部に設立され、エイズ患者を対象にした国内初のホスピスとしてスタートした。10年ほど前から、地域の末期がん患者も受け入れている。エイズ患者のために6床、がん患者のためにやはり6床あり、専属の医師と看護師・介護者によって、24時間体制の緩和ケア・介護が保障されている。また、カトリックとプロテスタント双方の聖職者がおり、患者の宗教的なニーズに対応しているし、他にも絵画療法などの療法士も出入りしている。

ケルコピウス氏によれば、マリア・フリーデンの役割は、死に臨んでいながらも必要な医療やケアを受ける場所を見つけられない人々に、そうした場を提供すること、死が隠蔽・否定される社会において、死と直面する人々に共感的な仲間として、人生の最後まで付き添うことであると言う。

このエイズホスピスにおいては、次の3つの原則が重視されている。死にゆく患者の個人性を無制限に尊重すること、治療者としてではなく付添い人として患者と共にあり続けること、患者の実存的な悩みや問いかけに、誠意をもって向き合い続けること、の3つである。

こうしたことは理念としては分かりやすいが、実際にどのように実現されるのかは分かりにくい。ケルコピウス氏は、彼の施設におけるふんだんな実例をもとに、その「実際」を示してくれた。例えば、患者が死ぬ瞬間までその個人性を最大限尊重されるという原則は、各患者が自宅の自分の部屋を再現できるように、全室が私物持ち込み可能な個室になっていて、画一的な病室臭さを払拭できるよう配慮することで、実現されている。現に写真で見た患者の部屋は、驚くほどに私的な空間となっていた。また、付添い人として徹底的に患者と共にあるという理念は、患者が亡くなってから少なくとも2日間はそのままベッドに寝かせ、家族や友人、他の入所者などを彼らのもとに誘い、十分に別れの挨拶ができるようにしているという、日本の一般的な感覚では驚くべき実践に見て取れる。

講演会の参加者からは、エイズ患者とがん患者が

共生する環境において、感染予防にどのような配慮をしているのかについて、また終末期の定義が難しいエイズ患者の受け入れ基準について質問があった。最初の問いへの回答に際してケルコピウス氏が強調したのは、日本の病院などで行なわれている汚物分別など、特別な処置は何も必要ない、ということであった。日常生活では感染リスクが極めて低いHIV感染症においては、これは当然のことであろう。

2つ目の問いだが、90年代半ばに登場した多剤併用療法によってHIV感染者の予後が大幅に改善し、理論的には老齢までエイズの発症を抑制できるようになったこんにちでは、確かにHIV感染症における「末期」の定義は難しいといえる。そして、現にマリア・フリーデンのエイズ患者は入所・出所を繰り返す者が少なくない、とケルコピウス氏は語った。また、入所し続けている者では10年滞在した者もいたと言う。（基本的に空きがあれば受け入れるとのことで、具体的にどういった入所基準が適用されるのかは明確にされなかった。）

日本でも緩和ケアは、がん患者だけでなくエイズ患者も対象となっている。ただ、上でも触れた予後の改善により、エイズ患者の緩和ケア利用は少ない。それでも、近年のある調査では、対象98施設のうち17の緩和ケア病棟がエイズ患者の受け入れ依頼を受けたことがあり、また実際に5施設で40例の受け入れがあったと報告されている。少ないながらも、エイズ患者のための緩和ケアは実践されており、今後も恐らくニーズはあり続けるであろう。こうした状況で、ハウス・マリア・フリーデンにおける先駆的な取り組みから学べるものは少なくないはずだ。

患者中心の優れた理念や貴重な実践経験を分かち合ってくださいとケルコピウス氏と、氏を招聘して本学にお連れくださった、臨床パストラルケア教育研修センター理事長のワルデマール・キップス先生に、心より御礼申し上げる次第です。



ロバート・ニーマイヤー教授講演会「喪失の体験と意味の再構成 レジリエンス[復元力]に関する最新動向」

山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講座特任講師 死生学・医療社会学）

昨年度末のウオグリン教授のワークショップに続いて、本年度も9月3日に法文2号館1番大教室にて、喪失・死別・グリーフにまつわる講演会を開催した。今回は、アメリカの心理学的な喪失研究の大家であるロバート・ニーマイヤー教授（メンフィス大学）をお招きし、彼が唱導する「意味の再構成」理論を中心に、いくつかの臨床事例も含めてお話しいただいた。会場には200名近い参加者が詰めかけ、ニーマイヤー教授の情熱的な話に聞き入った。

ニーマイヤー教授は、死別などの大きな喪失体験と向き合っていくには、その体験を意味づけていくこと、そこに自分なりに納得できるストーリーを見出していくことが不可欠であるとし、それを「意味の再構成」理論と呼んでいる。この理論は構成主義を枠組みに、6つの命題的要素（以下～）から成り立っている。

出来事としての死は、個々人が生きる上で依拠していた考え方や信条を是認または否認する

人びとは自分の生きる世界を特定の想定のもとに構築している。例えば死別について、子は親より早く死ぬものではない、または、多くの人間は老衰が病気で死んでいくものである、といった想定である。現実の死は、その想定どおりのこともあれば、それを裏切ることもある。後者の場合、個人が想定していた人生物語は破碎され、深い喪失感が当人を襲うことになる。

グリーフは私的なプロセスであり、個々人まったく独特で、かつ、親密な他者（故人）との絆にかかわっていて、自分という存在と切り離せない。ルービンの喪失の「二軌道モデル」では、人々の喪失適応が、生物的・心理的・社会的軌道と故人との関係をたどる軌道とを、同時にたどりながら進行すると言われる。ニーマイヤー教授は、多くのセラピストが前者に重点化しがちだが、グリーフにまつわる問題は、当事者が後者の軌道の歩みを疎かにした時に発生すると主張する。死後も（必要に応じて）故人といかに絆を継続させるかが鍵であると言う。

グリーフは我々が能動的にするものであり、受動的に降りかかってくるものではない。この主張が、「グリーフ」を単純に受動的なニュアンスが強い「悲嘆」と誤しきれない所以である。死別者は故人を喪失したことの悲しみに暮れるばかり

ではなく、同時に、社会で生き続ける人間として、破碎された自分の人生を再編してゆく存在である。喪失悲嘆と人生再編の両方を志向し、両者の間を揺れ動きながら、だんだんと後者に重点を移行するのが理想的なグリーフと考えられている。

グリーフとは、喪失によって揺らいだ自分の「意味の世界」を確認ないし再構成する行為である

人はそれぞれの人生物語を持っており、そこには筋書きが存在するが、喪失はそれを壊してしまう。人生をまるで偶発的な出来事の単なる羅列のように感じさせてしまう。こうした状況下で遺された者に必要なのは、故人を生前とは違う形で位置づけた新たな人生物語を、語りを通して再構成してゆくであると、ニーマイヤー教授は言う。

我々は他者とのつながりのうちに、生存者としてのアイデンティティを再構成してゆく。上記の「意味の再構成」は、疎外された個人には実現できない。語るという行為は聴き手の存在によって成立し、語り合うという行為によって促進される。個々人が抱える喪失を、例えそれが社会的通念に照らして受け入れがたいものであっても互いに分かち合っていくことが、社会的疎外を回避した形で、遺された者が新たな生を生きていくことにつながる。

喪失適応には、我々の人生物語がもっている一貫性を修復することが含まれる。この点では上述したとおりだが、喪失体験者が彼らの喪失の物語を話したがる、という事実から再確認できるとニーマイヤー教授は語っていた。実際、この講演会においてニーマイヤー教授は、ご自分の母君との死別体験を写真を見せながら我々に語り、分かち合ってくださいました。喪失体験者の意味の再構成がどう展開するのかを、身をもって示してくださいました。論理的思考だけでなく、感性を揺さぶられて、ニーマイヤー教授の理論を理解した参加者も多かったようだ。

こうした貴重な講演会の実現を可能にしてくださいました共催者のグリーフ・カウンセリング・センターの鈴木剛子先生とそのスタッフ、ならびに今回も素晴らしい通訳をしてくださった大東文化大学の近藤正臣先生に、心より御礼申し上げます。来年度も、グリーフについて引き続き学び考える催しを開く予定である。



ダニエル・オグデン教授講演会

清水 哲郎（次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学）

2008年9月16日（火）、来日中のダニエル・オグデン（Daniel Ogden）教授を迎え、講演会を開催し、「古代ギリシャ・ローマにおける、死のさまざまな次元 Dimensions of Death」という演題でお話いただいた。参加者は約40名。同教授は英国エクセター大学の古典学・古代史教授であり、古代の伝承の物語り、ギリシャ宗教、マケドニアとヘレニズムの王朝等を専門としておられる。今回の講演に関連する著作に、“*Greek and Roman Necromancy*” (Princeton Univ. Pr. 2001)、“*Night’s Black Agents: Witches, Wizards and the Dead in the Ancient World*” (Hambledon Continuum, 2008)がある他、沢山の著書、論文の業績がある。

今回の講演にあたっては、東北大学大学院文学研究科の荻原理准教授に、講演の企画にあたってもお世話になり、講演時にも、オグデン教授および講演概要の紹介や質疑応答時の通訳等をしていただいたため、円滑に会を進めることができた。

オグデン教授は、古代ギリシャのさまざまな文献を渉猟し、それに基づいて、冥界への旅の物語りおよび死者を呼び出す降霊（交霊）術（necromancy）をめぐる古代人の理解について話された。冥界（地下世界）との接点（出入口）として知られている場所（*nekuomanteion*）はギリシア周辺に広く分布している。それらの場所

の風景や構造が図示され、説明された。そのような場所は死者を呼び出す場所にほかならないということであった。また、現実世界からの出入口同士の地理的關係と地下世界の広がり（と想定されるもの）との關係は整合的ではなく、ある入口から冥界へと降って行った者が、現実世界に戻ってくると、とんでもなく遠いところの出口から出てくる（その入口と出口の間を地上で移動するには、冥界への旅にかかったよりはるかに多くの時間がかかるはず）というような物語りがあり、冥界は単に現実世界の地下に広がっているというより、異次元の世界と理解するほうがよい等と話された。

筆者はお話を聞いていて、冥界への旅という物語りと現実に行われていた降霊術（日本では口寄せは今もあちこちでなされている）との關係について興味をもった。前者の物語りは降霊ないし口寄せという風習を背景にしてこそ生まれたのだろうといったことを、冥界にイザナミを訪ねたイザナギの物語りを思い起こしながら考え、古代ギリシアの人々の他界についての考えと、日本の現代に至る伝統的な他界理解との間の、親近さについて、いまさらながらおもしろさを感じたのだった。



臨床倫理セミナー in さっぽろ

清水 哲郎（次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学）

2008年10月12日（日）本グローバルCOEと東札幌病院臨床倫理委員会の共催で、北海道自治労会館にて、「臨床倫理セミナー in さっぽろ」を開催した。これは昨年度まで日本学術振興会「人文・社会科学振興研究事業」受託研究として行われたプロジェクト研究《医療システムと倫理》（プロジェクト・リーダー清水）の企画として行われてきた活動を引き継いで、本グローバルCOEのリカレント教育として行うこととしたものである。

臨床倫理とは、医療現場で、医療者たちが患者・家族と向き合い、また寄り添いながら、医療・ケアを進めて行く際に起きる問題にどう対応していったらよいかを、医療者として考える営みであり、以前より、上記《医療システムと倫理》などにより、理論的に適切で、実践的に有効な臨床倫理のあり方を研究している。病が重篤である場合には、死生に関わる意思決定プロセスが臨床倫理の中心問題となるため、臨床死生学から見れば臨床倫理はその主要な部門であり、また臨床倫理から見れば臨床死生学は自らの営みを支援する不可欠の知の営みである。そこで、本グローバルCOEが現在行いつつあるリカレント教育《医療・介護従事者のための死生学》と連関するいわば出前授業として、各地の医療者ないし医療機関と協働して、臨床倫理セミナーを随時開催することとした（したがってこれは基礎コースの授業としても認定される）。今回開催の「臨床倫理セミナー in さっぽろ」はその最初のケースである。東札幌病院臨床倫理委員会は、以前から臨床倫理学研究を共同で行ってきた主要グループであり、今回の開催にあたっては、企画、宣伝、当日の運営と、主要な作業を担っていただいた。

さて、本セミナーには、本グローバルCOEからは事業推進担当者清水と特任研究員竹内が参加したが、東札幌病院はもとより、北大病院、札幌医科大学、北海道がんセンターなど札幌の医療機関、近隣の江別、砂川、苫小牧、さらには遠く旭川、帯広といった各地の医療機関に属する看護師等の医療従事者等、参加者は計75名となった。まず、午前9時半から1時間強、レクチャア「臨床倫理検討の実際 経過の記述と状況の整理」を清水が担当し、臨床倫理のコンセプトとプロセスの概観に続いて、臨床倫理検討シートの最初の部分の使い方を説明した。続いて、事例検討を午前中1例、午後2例に互って、全体討議とグループワークを、午後4時過ぎまで行った。

参加者から出された事例のうち最初のものは、高齢の女性で、乳がん手術後、夫が亡くなり、さらに下腹部にがんの可能性が高い腫瘤が見出されたが、治療方針をめぐって家族が考えることと本人の思いの間がしっかりしていないと思われる状況での医療者の対応を問うものであった（と、ここでは一面的に書かざるを得ないが、いろいろな要素を記述し、考え併せながら、患者・家族の複層的になっている思いを理解する作業が大事なのである）。次の事例は、社会的に活発な役割を果たしてきた高齢の男性が、予後が厳しい状況での治療についても自分の考え・意思を主張し、医療者と衝突するような状況で、医療者の柔軟な対応により事態が好転したというものであった。最後は、医師と患者の二者の話し合いで、ある手術が勧められ、そのうちにしないことになり、さらに再度するという結論になるというようなプロセスの中で、患者の心の揺れを受け止め、事情を医師から知らされることなくケアにあたる看護師の、患者、家族、医師との対応を中心とする事例であった。

以上、医療現場の生の現実が報告され、どうしたらよいかを共同で考える作業は、参加した医療者にとって好評であったが、グローバルCOEから参加した者にとっても、臨床現場の問題を実感し、臨床死生学が取り組むべき課題を再認識する機会ともなった。また、医療者が検討シートを使って検討をする様子に接することは、臨床倫理検討システムを開発するという当方の研究にとって貴重な機会ともなった。

臨床倫理セミナーは今後も各地で開催したいと考えている。医療従事者のみなさまからの誘致のお申し出をいただければ幸いである。





死生学研究会報告

第22回 2008年6月4日(水)

石川 公彌子 (本COE研究拠点形成特任研究員 日本政治思想史)

研究会において、「戦争と死生観“保田與重郎における死生観の変容”」と題して報告を行った。

本報告においては、保田與重郎の思想を昭和恐慌前後にマルクス主義の影響を受けた世代の代表としてとらえ、国学の影響を中心に分析した。太平洋戦争開戦以降の保田は、戦時体制批判を強めつつ、後鳥羽院に「滅びの美学」を見出し、戦役を自己の内面の美意識を守るための「自殺的討死」になぞらえ肯定していったのである。

参加者からは、保田を日本のマルクス主義者の典型とみなすより国学のマルクス主義的解釈の一パターンとみなすべきではないか、「死生観の変容」というよりは美意識の変容にすぎないのではないかと、などの質問が挙げられ、活発な討議が行われた。

なお、本報告の内容を含む拙論「イロニーの彼方 保田與重郎が試みた生」が、『RATIO』第6号(講談社、2009)に掲載予定である。



第22回 2008年6月4日(水)

大久保 豪 (医学系研究科博士課程)

研究会において大久保は「医療技術と先天性難聴～人工内耳装用の意思決定～」と題し、先天性聾児の親に対して、人工内耳手術を受けることをどのように決定したのかを問うたインタビュー調査の結果について報告した。人工内耳とは聴神経を直接刺激して聞こえの獲得を図る医療機器であり、多くの聾児が2歳から3歳でこれを装用している。しかし、機器が広まり始めてからまもないため、効果や副作用には未知の部分が多い。その上、頭部への埋め込み手術を要するため、手術を受けるか否かを決めるのは難しい。研究会では保護者たちの期待の内容、感じているリスクの内容について述べた上で、代理決定の悩み、それを手術決定へと促す言説(早くつけた方がよい)を紹介した。出席者のみなさまと主にもろろ文化との関連で活発な議論をすることができた。また、方法論に関しても貴重なご意見をいただいた。今後の研究の展開に対して有意義な示唆を得ることができ、私にとっては実り多い研究会であった。



《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース

夏季セミナー・秋季セミナー

清水 哲郎（次世代人文学開発センター上廣死生学講座教授 哲学・臨床死生学）

本グローバルCOEが行うリカレント教育として、本年1月に1回で修了する3日間のコース《医療・介護従事者のための死生学》冬季セミナーを開催したが、今年度は、参加者が継続的に研鑽を積むための「《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース」を開設した。基礎コースは、臨床現場でケアに従事する方たちが、死生学一般および臨床の場に関わる臨床死生学を学ぶことを通して、実践に生きる知を涵養することを目指すもので、参加者は、年に3回ほど開催するセミナーの講義や演習に参加して研鑽を積むことになる。コース修了には、24コマ分の授業に参加し、かつその研鑽の成果を反映するようなレポートを提出することが課せられている。なお、冬季セミナー参加者は、冬季セミナーで受講した授業を基礎コースの授業として読み替えて、これに参加することができるようにもしてある。

【夏季セミナー】

さて、基礎コースの最初の活動として、2008年7月19日(土)～20日(日)の2日間、東京大学グローバルCOE夏季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》を開催した。これは、これから同コースに参加して研鑽を始めようという方を対象とした「初心者向けセミナー」という企画であり、沖縄、中国、東北など遠方からの参加者を含み、正規受講生66名、その他聴講生等20名、計86名の参加を得て行われた。

死生学コア（島園担当）、臨床死生学コア（清水担当）および臨床死生学トピック（高橋担当）は、冬季セミナーと基本的に同内容の講義を行なった。死生学トピックの二つの講義のうち、まず、安藤泰至教授（鳥取大学・宗教学）は、死についての人々の考え方をタイプ分けして考えつつ、深く問い進む思索を展開された。次に、秋山聰准教授（美術史学）は、西洋におけるキリスト教の歴史における聖遺物とその美術史との関わりを解説され、聖遺物崇拜に現れた民衆の死生観の一端を語られた。

臨床死生学演習は2コマ行い、参加者からの事例報告に基づき、グループワークと全体討議により、重篤な状態になった高齢者に対する延命を目指す対応のあり方、および、重い障害を

もって生まれた子の治療・ケアのあり方をめぐって共同検討を行い、家族・医療者間のコミュニケーションを中心に問題を考えた。

受講者には、熱心に、かつ積極的に授業に参加していただき、とても有意義な二日間を過ごすことができたと思う。

夏季セミナー授業実績

【死生学コア】(1コマ)	・死生学とは何か 医療現場と人文学の役割	島園 進
【死生学トピック】(2コマ)	・生から死を見る、死から生を見る - 死生観と宗教文化	鳥取大学 宗教学・生命倫理 安藤 泰至
	・西洋美術と死 - 中近世を中心に	秋山 聰
【臨床死生学コア】(2コマ)	・臨床死生学ベーシック1/ケアにおける死生の理解	清水 哲郎
	・臨床死生学ベーシック2/臨床倫理学/スピリチュアルケア	清水 哲郎
【臨床死生学トピック】(1コマ)	・生と死における医療者自身の当事者感覚と診療スタイル	高橋 都
【臨床死生学演習】(1コマ)	・事例検討1/事例検討2	清水 哲郎・高橋 都・山崎 浩司

*所属を示していない講師は、G-COE事業推進担当者

【秋季セミナー】

2008年10月18日(土)に、秋季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》 テーマ：産むプロセスの死生学 を開催した。今回は、本年1月開催の冬季セミナーないし7月開催の夏季セミナーに参加して、基礎コースの入門的授業を受けた方を対象として企画し、テーマを決めて一日セミナーを行うことにした。そこで、前回までのセミナー受講者からの要望を考慮して、周産期を取り上げ「産むプロセスの死生学」というテーマを設定した。参加者は、沖縄、九州、北陸など遠方からの参加を含み、正規受講



秋季セミナー講師 上妻教授

生39名および聴講生等20名強、計約60名であった。

午前中には、東京大学病院女性診療科・産科の科長をされている上妻志郎准教授に、周産期医学について講演をしていただいた。産科医療の現場で新しい生命の誕生に立ち会っておられるわけであるが、時に母体の死亡や、死産や出産直後の新生児の死という事態が起き、子を亡くされた母親をはじめとするご家族に接しておられるお立場から、実情を丁寧にお話しいただいた。午後はまず臨床死生学演習を行い、参加者の中から生むプロセスの医療現場で働いておられる3人の方に簡単に事例を紹介していただいた上で、全体で意見交換をした。胎児の異常が分かって中期中絶を選んだ親、死産した子に会うことを拒否した親、そして生後1日で死にいたった子の母親と、肉親の思いをどう受け止め、対応していくかということが重い課題として感じられた。最後に、シンポジウムを行った。出生前診断の場で働きながら研究をしておられる小笹氏は、診断をめぐる揺れ動く妊婦の様子とそれをどうサポートしていくかを語られた。宮城県の農村地帯を中心に助産婦の聞き取り調査など民俗学研究をしておられる鈴木氏は、水子供養や間引きなどについて、歴史とそこに現れている子のいのちについての人々の思いについて話された。最後に、赤川准教授は、少子化問題について、少子化が進んでも特に困ったことにはならないということを、さまざまなデータを検証しながら論じられた。

全体として、産む(ないし生まれる)プロセスにおける死生の問題について、参加者は問題がどこにあるかを改めて認識する機会となったと思われる。

秋季セミナー授業実績

- | |
|---------------------------------------|
| 1. 講演 (臨床死生学トピック) |
| 講師: 上妻 志郎 (東京大学病院 周産期医学) |
| 演題: 周産期医学について |
| 2. 事例検討 (臨床死生学演習) |
| 担当: 清水 哲郎 / 山崎 浩司 |
| 3. シンポジウム (死生学トピック/臨床死生学トピック) |
| ・いのちに向き合うケア |
| 小笹 由香 (東京医科歯科大学 生命倫理研究センター 助産学・生命倫理学) |
| ・中絶と水子供養 鈴木由利子 (東北学院大学 民俗学) |
| ・少子化を前提とした社会づくりに向けて |
| 赤川 学 (東京大学 社会学) |



秋季セミナーで事例を紹介する参加者



フロアとの質疑応答

* * *

冬季セミナーのお知らせ

来る2009年1月31日(土)に、「高齢者のケア」をテーマとして、冬季セミナーを開催予定である。これは秋季セミナーと同様、基礎コースの初心者向けセミナーに参加しコア講義を受けた方を対象としているが、余裕がある限り、その他の聴講者も受け入れることができるであろう。現在、企画を練っているところであり、詳細は本グローバルCOEのウェブページやメールマガジンを参照されたい。基礎コースにエントリーしておられる皆さまはもちろんのこと、多くの方にご参加いただければ幸いである。

* メールマガジンの登録は下記から行えます。
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/ja/melmaga.html>

目 次

— CONTENTS —

●巻頭エッセイ●

〈あいだ〉の出来事としての生と死——死生のケアの現象学に向けて——

榊原 哲也 2

「滅びの美学」の構築に向けて——死生学と社会学

赤川 学 3

●イベント報告●

公開シンポジウム「非業の死の記憶——追悼儀礼のポリティックス」
ワークショップ「死者の記憶と表象のポリティックス」

池澤 優 4

国際・公開シンポジウム『礼拝像と奇跡 東西比較の試み』を終えて

秋山 聰 6

生と死をめぐる映画上映会II「チーズとうじ虫」上映会・監督講演会
〈ホームビデオがドキュメンタリー作品になるとき〉

高橋 都 7

第3回応用倫理・哲学研究会

一ノ瀬正樹 8

ティーレ・ケルコビウス氏講演会「エイズ患者さんと共に生きる」

山崎 浩司 9

ロバート・ニーマイヤー教授講演会
「喪失の体験と意味の再構成——レジリエンス[復元力]に関する最新動向」

山崎 浩司 10

ダニエル・オグデン教授講演会

清水 哲郎 11

臨床倫理セミナー in さっぽろ

清水 哲郎 12

死生学研究会報告

石川公彌子／大久保 豪 13

《医療・介護従事者のための死生学》基礎コース —夏季セミナー・秋季セミナー—

清水 哲郎 14

●企画案内●

冬季セミナーのお知らせ

15



死生学 DAL S ニュースレター No.21

平成20年11月27日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 島蘭 進

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>